

論文要旨

【学位論文題目】 「バレエ・デ・シャンゼリゼ-第2次世界大戦後フランス・バレエの出発」

【氏名】 深澤 南土実

【要旨】

本研究は、バレエ・デ・シャンゼリゼの全体像を明らかにし、本バレエ団の功績や役割を考察したうえで、このバレエ団をフランス・バレエ史上に位置づけることを目的とする。

バレエ・デ・シャンゼリゼは、1945-1951年の約7年間、シャンゼリゼ劇場を拠点としたバレエ団として存在し、戦後直後の混乱のなかで停滞していたパリ・オペラ座から飛び出した若手バレエ・ダンサーらと当時の一流の芸術家たちが革新的な作品を発表した、パリ・オペラ座と並ぶ戦後フランスを代表するバレエ団であった。しかしながら、バレエ・デ・シャンゼリゼの活動と上演作品についてはこれまでその全貌が明らかにされておらず、学術的な研究はほとんどなされていない。本研究は、先行研究で指摘されたような「新しいダンス」を生み出したこのバレエ団の活動の軌跡を、主に数々の上演作品を軸としながら明らかにし、バレエ団の特徴やバレエ団の全体像を検討した。その際、パリ・オペラ座バレエの同時期の活動も念頭におきながら、フランス・バレエ史上にバレエ・デ・シャンゼリゼを位置づけることを試みた。研究において、バレエ・デ・シャンゼリゼのプログラム類や写真・映像資料、フランスとイギリスの当時の新聞・雑誌の批評や評価、バレエ団関係者の手記や著作、そして同バレエ団のスターであったジャン・バビレへのインタビューなどを一次資料として考察を進めた。

第1章「バレエ・デ・シャンゼリゼ誕生前夜」では、バレエ・デ・シャンゼリゼ誕生の経緯と契機を明らかにした。1942年6月以降のジャンヌ・シャラとローラン・プティによる「ダンスのリサイタル」で発表した作品にはバレエ・リュスの継承が随所に見られた。続く1945年3月のリサイタル「ローラン・プティ」で発表したプティとボリス・コフノの最初の共同作品《旅芸人》と、公演「ダンスのタベ」で発表された《ランデヴー》の両作品が成功を収め、それがバレエ・デ・シャンゼリゼ誕生の契機となった。とくに《旅芸人》、《ランデヴー》の2作品が観客を魅了したのは、占領下のパリの苦難の状況を映し出し、社会の閉塞感や不安や孤独、また愛と死を表現したバレエに、観客、つまり第2次世界大戦直後のフランス人が惹き付けられたからであった。

第2章「1945-1946年」では、バレエ・デ・シャンゼリゼ設立後の活動について上演作品を中心に考察した。バレエ・デ・シャンゼリゼは設立後1945年10月の最初のシーズンから、バビレら若いダンサーたちと新たな内容のバレエを前面に出すことによって人々を魅了した。プティの振付は、アメリカの影響、とりわけレビューなどの大衆的な要素や娯楽性を取り入れ、大胆でアクロバティック、かつエロティックなスタイルを取り入れたものとなる。また、ダンサーが床に肩や背中をつけるなどの振付の特徴も当時のバレエには珍しかったため、「新しい」バレエと評価され、広範な観客を惹きつける要因になった。バレエ団は、新鮮で自由に満ちあふれ、振付には即興的な要素も多く含んだ作品を創作した。それは若い芸術家たちの「多様な才能の融合」であった。さらに、バレエ・デ・シャンゼリゼは戦後直後のイギリスのダンス界にも新しい風を運び、成功を収めた。

第3章「《若者と死》(1946) - 「生」の象徴としての「若者」」では、バレエ・デ・シャンゼリゼの「象徴」とも言える

代表的作品《若者と死》を深く掘り下げて作品解釈を行った。「多様な才能の融合」の象徴的作品である《若者と死》の「若者」はバビレ自身であった。さらに若者の「生」を「苦悩」という感情によって表現し、若者の持つ「狂気、あふれ出る感情、欲望、情熱」を普遍的に表現した作品であったため、当時のバレエ作品において非常に革新的なものとなった。このように《若者と死》は、死と隣り合わせにある「若者」の「苦悩」に代表される「生」をダンサーの身体そのものに具現化・表象化した「傑作」となり、バレエ全体への「宝」として、今なお再演され続けている。

第4章「1947-1951年-創作の嵐と分裂」では、バレエ・デ・シャンゼリゼが1947年以降に発表した新作を中心に解散までのバレエ団の動向を明らかにし、バレエ団の遺産を考察した。プティやバビレらスターが徐々に退団し「多様な才能」が不在となり、《若者と死》の上演さえ不可能となったバレエ団は、その後継者を育成する「伝統」というバックグラウンドや資金源を持ち得ず、衰退に向かっていったのであった。バレエ団に関わった国外の様々な振付家の作品も観客を惹きつけるバレエ団の「特徴」や「個性」、「魅力」にはならなかった。

結論として以下を指摘した。バレエ・デ・シャンゼリゼは、バレエ・リュスを継承した一面もあるが、シャンゼリゼ劇場を拠点として、戦中、戦後の時代性・社会性を反映したリアリティのある作品を発表した。加えて、同バレエ団は、自由な精神を持った振付家やダンサー、そして当時のパリの主要な芸術家に関与した舞台美術や衣裳も際立っていたと言える。また、バレエ・デ・シャンゼリゼの人気はパリ・オペラ座バレエが特権的な存在感を失い低迷していた、セルジュ・リファールの不在期間の1945年から1947年とほぼ一致していることが本研究で明らかとなった。またその後もパリにおける2大バレエ団として、パリ・オペラ座とバレエ・デ・シャンゼリゼはダンサーや振付家の行き来があり、相互補完関係にあった。すなわち、バレエ・デ・シャンゼリゼは第2次世界大戦後のフランス・バレエの出発を担い、パリ・オペラ座バレエをはじめ、フランスのバレエ界やイギリスのバレエ界にも影響を与えた存在となった。

バレエ団は資金不足や人間関係の悪化などにより7年で活動を終えてしまったが、こうしたバレエ・デ・シャンゼリゼの活動は、本研究で示したように、新しいダンスを模索し、第2次世界大戦直後のネオ・クラシックダンスで中心的役割を果たしたと言えよう。バレエ・デ・シャンゼリゼの活動が、その後の50年代の活気に満ちたダンス界の新しいスタイルへと繋がったのである。つまり、バレエ・デ・シャンゼリゼは、戦後直後の混乱の中で葛藤と模索を繰り返しつつも、戦前のダンスと戦後のダンスとの橋渡し役以上の、「新しいダンス」を切り開いたバレエ集団であったと位置づけることができる。バレエ・デ・シャンゼリゼは、第2次世界大戦後フランス・バレエの出発を担ったバレエ団であったと位置づけられる。